
宝の在り処

行平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宝の在り処

【Nコード】

N1420I

【作者名】

行平

【あらすじ】

ある日、匿名で送られてきた宝の地図。そこにあったのは、死体だった。

(前書き)

メッセージ性はありません。

プロローグ

「宝探しの地図なんですけど」

かすかへすくろ
春日部卓は、会社の休憩室で同僚と話をしていた。

「馬鹿馬鹿しい。子どもじゃあるまいし」

おかわやすし
小川康史は、そう言つと、ふう、と煙草の煙を吐き出した。

「そうですか」

卓が地図をポケットにしまおうとすると、

「あつ、待て待て、ちょっと見るだけ見たいから」

康史は慌てて煙草をもみ消して、地図をひったくるようにした。

少し眺めてからすぐに、卓に返した。

「誰から？」

「それがですね、直にポストに入れたみたいで、誰だか分からないんですよ」

「近所の子どもの仕業だろ。宝の地図とはね。おおかたがらくたでも」

ぶつぶつ言っている康史を尻目に、卓は、

「僕は今夜、行きますけどね」

休憩時間が終わるから僕はこれで、と言つてその場を後にした。

その日の夜。

地図の場所は、前日の雨で地面がぬかるんでいた。

卓は、長靴とスコップという完全装備。

「結局、来たんですねえ」

と卓は言った。

康史は実際には興味津々だったようだ。

康史は、がっしりした体躯で見た目はいかつい。反対に、卓は小柄だった。だから今回、地面を掘る体力仕事ということで康史に声をかけたのだった。

康史の、いかつい見た目と、好奇心旺盛な子どもっぽい内面とのギャップがおかしくて、卓はクスクス笑った。

「うるせえよ」

「ああ……すみません……」

「で、どうだ」

康史が訊いた。

「どう、と言いますと?」

「ありそうかって言ってるんだよ」

少し苛立たしげに康史は言った。

卓はいったんスコップを懐中電灯に持ちかえて、屈んだ。

「ええ……、なんか、それらしいものがありますねえ……」

「本当か!?! どれ」

康史も手を止め、地面を見る。

「うつん……これは」

と卓。まじまじとそれを見ている。

「……? これは……なんだ?」

康史には、それが何なのか分からなかった。

「そうですね……、見た感じ、人の指のようですねえ……」

「……!?!」

地面から、人の指が生えていた。

雨が降った後で土が流され、指だけが地表に露出していたようだった。

二人は、しばらく沈黙した。

居酒屋にて（一）

くまがいこうすけ ひだかたける
熊谷浩介は、日高武と居酒屋にいた。

「宝の地図？」

武の話聞いていた浩介は、いぶかしげに聞き返した。

「そう。ポストに入ってたんだけど」

「子どものいたずらじゃないの」

「そうだよね……君の出る幕はない、か」

大学生のころから、独立すると息巻いていた浩介は、事務所を構えていた。

独立したい理由が『会社勤めがいやだから』だったからか、立ち上げたのは会社ではなく、探偵事務所だった。

「徳川の埋蔵金でもあれば別だけどな」

「そんなに儲からないの？」

「慎ましく生活してるよ」

「そんなものかあ」

「知り合いのつてに頼つてるところが大きいかな。松田俊介つてやつからたまに話が転がりこんでくる。あいつは東京で。埼玉県の事案は俺んとこつてわけだ」

「ふうん」

武は、松田が誰かは知らないし興味もなかったが、浩介にはそれなりに人脈があるのだろう、と思った。

「最近また東京に行ったんだぜ」

自慢気に言う浩介に、武は、

「東京に行ったことを自慢すると田舎者だと思われるよ」

と釘を刺した。

浩介は顔をしかめた。

「探偵っていうと名前は格好いいけど、浮気調査とかばっかだ」

と浩介は愚痴をこぼした。それから苦々しい顔で、不味そうにビールを飲んだ。

武もつられるようにしてビールを口に運んだ。

二人は大学生のころ同級生で、卒業してからも、時々こうして呑みに行くのだった。

空になったグラスを見て、武はビールを追加注文した。

所沢弘志と紀子

所沢弘志とくさざわひろしは会社からの帰り道を、疲れきって歩いていた。ふと前

方を見ると、弘志の妻、紀子のしこがこちらへ向かってくることに気づいた。声をかけようとして、思いとどまった。

隣に男がいることに気づいたからだ。

浮気か？

猜疑心がむくむくと湧いてくる。

思わず身を隠した。踵を返して、少し遠回りして帰ることになった。

家に着き、夕食を済ませてから、さりげなく問い質してみた。

「そういえば紀子、今日どこかに出かけたのか」

紀子は一瞬、思考を巡らせるような顔をして、

「あら、友達と出かけるって言わなかったけ？」

と言った。

「友達」

「ええ」

「ふうん」気にも留めていないようなふりをして、それ以上追及しないことにした。「今日は疲れたから、寝るわ」

「そう」

紀子は振り返りもせず返事をした。

寝室へ入ると弘志は、紀子の携帯電話をこっそり確認した。

上尾真二。

あの男の着信がある。

あの男が紀子を誘った……？

そういえば、まさか。

「宏子は俺の子か」

寝室に入って来た紀子を確認するなり、弘志は、三歳になる娘、宏子ひろこのことを訊いた。

「……何を言い出すのよ」

紀子は心底、驚いたふうだった。

「いや、なんでもない」

何を言っているんだ俺は。

弘志はバツの悪さを感じた。

「ねえ……」

「なんだ」

「あなた、疲れてるの？」

「そんなことはない」

「変よ……」

「変？」

「なんだか、最近のあなた、怖い……」

「怖い？ 俺が？」

「殺気だつてるっていうか……神経質になつてるんじゃないかって、上尾君も」

そこまで言つて、紀子は口をつぐんだ。思わず不用意な発言をしてしまい、慌てたようだった。

「あの男が、何だつて？」

紀子は返事をしなかった。

二人とも互いに背を向けた格好でベッドに寝転がっていた。

三人は大学生のころに知り合った。

真二は外向的な性格で友人も多く、成績も優秀だった。

内向的な弘志は、そんな真二に、いつも劣等感を覚えていた。

紀子の交友関係は当時から広く、男友達も多かった。

今でも、女友達と泊まり掛けて遊びに行くことも珍しくない。

だから何も疑わしいことはないんじゃないか。あの二人には何も
ない。俺の勘違いだ。

弘志は必死で疑惑を打ち消した。
とりとめもなく考えていたが、ようやくのことで睡魔がやってき
て、眠りに落ちた。

数日後。

弘志は少し早めに帰宅した。頭が重く、体調がすぐれなかった。
家の近くまで来た、その時、玄関の前に、真二の姿を見た。
決定的だ、と思った。

やはり、二人は。

弘志は、帰っていく真二を、気づかれないよう遠くから睨んだ。

ふつつり、弘志の中で、何かが切れた。

家に入って間もなく、また紀子の携帯電話を確認した。

上尾真二。

発信。

数回のコール。

「……はい」

居酒屋にて(二)

「そついやあ……」浩介が、ふと思い出したように言った。「弘志
って覚えてるか、所沢弘志」

「ああ、あの大学の同級生の……そんな奴いたっけ」

「ふん、お前も他の奴に言わせれば『そんな奴いたっけな』程度な
もんだろつよ。まあ俺も言われるまで忘れてたけどな」

武は渋い顔をした。

「君は饒舌だけど、脱線するのが悪いところだね。僕の悪口はおい
といて」武はまた釘を刺した。「その弘志がどうかしたの」

「ちよつと偵察してくれないかって依頼が来たんだ」

「弘志から？ 奥さんの浮気調査？」

「逆だよ」

「え？」

「奥さんからだ。あと浮気調査ではなくて」浩介はため息をついた。

「何だか最近おかしいから様子を見てほしいと」

様子をみるって医者じゃあるまいし、と浩介はぼやいた。

「で、おかしい理由が分かったの」

分かるものだろうかと、と首を捻りながら武は訊いてみた。

「それがさ、あれ、リストラされたっぽいぜ」

あれ、とは弘志のことだろう。ずいぶん言い種だと思ったが武
はひとまず、

「リストラ？」

と話を促した。

「毎朝、家を出てから、公園に向かっているんだよ。リストラされたことは家族には言えないから、会社に出勤しているふりをしてるんだろ？」

「それはまた典型的な」

ありがちな話だな、不謹慎ながら、と武。

浩介は話を続ける。

「そんで何するでもなく一日をやり過ごす。そんなことが毎日続いたら、こっちがおかしくなるぜ」

「毎日尾行してるの」

「追尾が可能な範囲でな。なんの動きもなけりゃ飽きるから、飽きたら帰る」

そんなんでいいのか、と武は思いながら、

「君はよっぽど退屈が嫌いなんだね」

と言った。すると浩介は、我が意を得たと言わんばかりに、

「けど、最近は退屈でもなくなったんだ」

浩介の、さつきまでの苦々しい顔がうってかわって、ぱっと明るい表情になった。

その時、ずいぶん前に追加注文していたビールがようやく運ばれて来た。

上尾真二あけおしんじは、紀子と街を歩いていた。

「弘志がね……最近、変なのよ」

紀子がそう言ったのを聞いて真二は、旧友のことを思い出した。学生時代から真二は自由奔放な性格だが、それとは対照的に弘志は、実直で生真面目、四角四面な性格だった。

真二にとっては、特別、意識することもなかったが、弘志は何か真二に対して敵愾心さえ持っているようだった。

弘志には少し、神経質なところがある、そう真二は感じていた。

「まあ、あいつのことだからなあ」

きつと、些細なことで気に病んでいるんだろう。そう言うと紀子は、

「うん……でも最近、とくによ」

数日後、真二は、近くに来たついでに紀子の家に寄ることにした。

「弘志、宏子のこと……真二の子じゃなかった疑ってるみたい」

「はは、あいつらしいな」

「笑い事じゃないのよ」

「でも俺ら、そんな関係じゃなかったじゃねえか」

真二は女遊びは激しかったが、紀子とは、友達以上の関係はなかった。

「一つ屋根の下にずっと一緒にいると、フラストレーションが溜まっちゃう、そんなもんなんだろう」

真二は自分で言ったことに、うんうんと頷いた。

「他人事だと思って」

ふう、と紀子は呆れたようにため息をついた。

「人付き合いがいいのはいいけどな、少し気をつけるよ」
それだけ言って真二は帰った。

その日の夜。

電話がかかってきた。

紀子の携帯電話からだ。

「……はい」

「……」

「もしもし？」

プツツ、ツー、ツー、ツー……。

なんだよ、と呟きながら真二は欠伸をして、もう寝よう、と思った。するとまた電話が鳴った。ちっ、と舌打ちしてから、電話に出た。

弘志からだった。

弘志と真二

真二は弘志の家に着き、インターフォンを押すとすぐに弘志が玄関に出てきた。

「よお弘志、久しぶりだな」

「ああ」

返事をしながら弘志は、中に入るよう真二を促した。

真二はリビングに座り、室内を見回してから、口を開いた。

「妻帯者は大変か？ 独り身は気楽でいいぞ」

「……相変わらずだな」

「お前は陰湿さに、さらに磨きがかかったんじゃないか？」

はは、と真二は笑ったが、弘志は、にこりともせず、テーブルに視線を落としたままだった。

「……悪い、お茶も出してなかったな。コーヒーでいいか」

「あ？ ああ。ブラックで頼むよ」

コーヒーを淹れて持ってきた弘志の顔を、真二は、やっぱり神経質そうだな、と思いながら眺めていた。

「どうぞ」

「どうも」

真二がコーヒーをすすった瞬間、これまでほとんど目を合わさなかった弘志が、真二をじっと見据えた。

しばしの沈黙の後。

真二は顔を歪め、苦悶の表情を浮かべた。

弘志は、そんな真二を、冷酷な表情で見つめていた。

「……なにか……入れたか？」

それが、真二の最期の言葉だった。

居酒屋にて（三）

武は店員さんからビールを受け取り、テーブルに置いた。

それから浩介の顔を見ると、目が輝いていた。何か良くないことが起きたな、という予感がした。

浩介は昔から退屈が嫌いな分、刺激的であれば何にでも首を突っ込む性質だった。

浩介は、さらに話を続ける。

「依頼人である奥さんと、連絡がとれなくなった。それだけじゃない。家を見張っていても、弘志は見かけるが、彼女を見かけなかった」

「ふうん。たまたますれ違いになったんじゃないの」
飽きたら帰ってしまうんだから。

「これはクサイね」

「クサイかなあ」

事件のにおいがする、と浩介が言っている一方で、武は、浩介の話に着にして呑んでいるようなものだったから、話し半分に聞いていた。

浩介は一気にしゃべって、のどが渴いたのか、勢いよくビールを流し込んだ。

武は、そういえば弘志から『結婚しました』っていう葉書が来たな、と思い出した。
久しぶりに、弘志に会ってみるか。葉書に書かれていた住所はそう遠くなかったはずだ。

ああいそ、と言って店員さんを呼び、二人は店を後にした。

弘志と武

工具箱からボールを取り出して、しっかりと握る。

弘志は、真っ暗な闇の中にいる。

真二の頭部を目がけ、ボールを振りおろす。

殴っている。何度も、何度も……。

ボールを持った手に、鈍い感触が伝わる。

すでに息絶えているだろうが、それでも殴る手を休めない。止まらない。

嫉妬、憎悪。

どす黒い感情が渦巻いている。

「うっ……」

弘志は、自分の呻き声で目を覚ました。じつとりと汗ばんでいる。仰向けの姿勢のまま動けなかった。

「夢……?」

朝日が射し込んだ窓に目を移した。

ベッドから這い出て、時計を見る。

日高武という同級生から連絡があり、久しぶりに会おうと言われたのだ。そして今日、家に来ることになっていた。

身支度を整え、リビングへ入る。

紀子と宏子はすでにリビングにいた。

人に自慢したいくらいの絵に描いたような家庭だ、と弘志は二人を眺めながら思っていた。

しばらくして、武が来た。

玄関へ向かう。

「久しぶり」

「ああ、まあ上がれよ」

「じゃあ遠慮なく。悪いね」

武をリビングへ通すと、弘志は誇らしい気持ちで、

「妻の紀子と、これが宏子だ」

と武に紹介した。

武は、弘志が指し示した方向に目をやって、それから、微笑を浮かべながら、ゆっくり弘志の方を向いた。

「弘志、今、幸せか?」

「当然だろ、幸せだ」

「そうか」

武はなぜか憐れむような表情をしていたが、それがどういう意味か、弘志には分からなかった。

提案

いつものように、浩介と武は居酒屋にいた。

「同窓会？」

浩介は目をしばたいた。

「うん」

「興味ないな」

「そう言わずにさ」頼むよ、と武は懇願した。「どうせ暇なんだからっ？」

「失礼な」浩介は憚然として言った。「最近は何れも頼り込んでるんだぞ」

「ああ……そういうば、この間、弘志に会ったんだけど」

武は、その時の弘志の様子を語った。

「……ふむ。なるほどね」

浩介は眉をひそめて、考えこんだ。

浩介が考え事をしている時は、何を言っても聞こえないことを知っていた武は、それきり沈黙して、ビールをちびちび呑むことに徹していた。

事務所にて

小川康史と春日部卓は、死体を発見したという理由で浩介のもとを訪れていた。

吉見賢一よしみけんいちは、友人が最近会社に出てないらしいし、連絡もつかない、ということと相談しに来ていた。

事務所の別室の扉が開いて、浩介は、

「やあ、みなさんお揃いで」と挨拶した。

人を待たせて申し訳ないような素振りもなく、飄々としていた。

同日同時刻に来るよう三人を呼びよせていた。話を聞くなら一度にまとめて、いっぺんにやったほうが早いだろうという算段だった。

電話で用件はあらかじめ聞きましたが、と浩介は前置きして、「えっと、小川さんに春日部さん、で、その死体は？」

「怖くてそのまま逃げちまったんだよ、こいつが」

と小川康史は春日部卓を指差した。

実際は、康史のほうで腰が抜けてしまい、収集がつかなくなって、そのまま帰ったのだが、卓は康史の体面を考えて、

「そうなんです」

と話を合わせた。

次に浩介は吉見賢一のほうを向き、

「えっと、吉見さん……行方不明になったのは……」

浩介は、人探しながら自分のやる仕事ではない、警察に捜索願を出して終わりだ、と思っていたので、あまり乗り気ではなかった。

話を振られて、吉見賢一は答えた。

「僕の友人の、上尾真二という男です」

「上尾真二？」

康史が訊き返し、卓は、えっ、と驚いた。

「知り合い？」

と浩介。

「覚えてないんですか？ 大学の時の」

と卓が言ったのを引き継いで、

「あの女たらしだよ」

康史が吐き捨てるように言った。

「ほう」浩介は感嘆した声をあげた。「とんだところで同窓会と相成ったわけだな」

三人は大学生の時の同級生だったから浩介のもとを訪れたわけだが、浩介はそこにいる全員のことを全く覚えていなかった様子で、へえ、凄い偶然があったもんだな、と、ひとしきり感動していた。

浩介のそんな姿を見て卓は、
「あの頃から変わってないですね」
人より一風変わってるけど、と言ったが、浩介は上の空で、うん、
と生返事をしただけだった。

弘志

紀子……、宏子……。

妻と我が子を手にかけている。
泣きながら、ありったけの力で、首を絞めている。
苦痛に歪む、紀子の顔。
輪郭が歪んで、その顔が、徐々に、宏子の顔になる。
そこで弘志は目を覚ました。

「……なんだよ、この夢」
びっしょりと汗をかいていた。
最近、悪夢にうなされてばかりいる。
なぜ、こんな、いやな夢を見るのだろう。

「パパ、おきて〜」

宏子の声がした。

階段の下から呼んでいるのだろう。

パジャマ姿のままリビングへ入ると、紀子がキッチンに立っているのが見えた。

いつもの朝の光景だ。

テーブルについて、家族三人で朝食を食べる。どんなに忙しい時でも、そうしていた。

弘志にとって、大切な一時だった。

「宏子、お弁当ついてるぞ」

宏子の口元についているご飯粒をとってやりながら、弘志は微笑んだ。

朝食後、玄関へ向かう。

いってらっしゃい、と微笑む紀子に見送られ、弘志は家を出る。

仕事が終わって帰宅すると、家族が温かく迎えてくれる。

そんな日々が続いていた。

ある日、一通の手紙が来た。

「同窓会のお知らせ？」

裏を見ると、差出人は、日高武、とあった。

当日

朝からの雨がやまず、夜になっても降り続いていた。

武は、弘志と歩いていた。

「同窓会っていつても、そんな人数集まんなかったんだけど」

武は間を持たせようと、弘志に話しかけた。

「悪いな、わざわざ」

と弘志は詫びた。雨音に掻き消されそうなほど小さな声だった。

武は、迎えに来たことを言っているのだろうと思って、

「いや、家、近いから」

と答えた。

そこで会話が途切れた。

傘に落ちる雨の音だけが響いた。

武は、弘志には武の声など聞こえていないかのように感じた。

弘志は空を見据えていた。まるで、雨粒を数えているかのようにだった。

向かった場所は、浩介と武の行きつけの居酒屋だった。

「呑み屋か、久しぶりだな」

到着すると弘志は、消え入りそうな声で、ひとりごとのように呟いた。

バサバサと傘の水滴を払いながら、武は弘志に声をかけた。

「君は覚えてないかもしれないけど、浩介が先に来てるはずだ」

同窓会の席で

「弘志ってさ、紀子とくつついたんだよな」

席に着くなり唐突に話を切り出したのは浩介だった。

「ああ、まあ」

驚きと照れがない交ぜになったような微妙な表情で、弘志は返事をした。

「同級生同士がくつつくつてのはなかなか便利だな」

「ちよつと浩介……」

武が制したのと同時に弘志は、

「便利？」

と訊き返した。

「こつこつこつこつに、同窓会の連絡をするのにだよ」

「ああ」

そういうこと、と言ったきり弘志は沈黙した。

「相変わらず陰気だな」

ふんと鼻を鳴らしながら浩介は言った。武は、

「君も相変わらずだ」

と言つてやったが、浩介は一向に気にする様子はない。

弘志のほうは、微かに口角を上げた。笑っているつもりだろうが、武には、弘志が憔悴しきっているように見えた。

「ところでさ」と浩介。「来ないのか、お前の奥さんは」

一瞬の間があつて、

「何、言ってるんだ」弘志が言った。「顔を、忘れたのか？ いるじゃないか、ここに」

弘志は、自分の左隣を指し示した。

武は、少し寂しそうな顔をした。

浩介は、とくに驚いた様子でもなく、無表情で、弘志が指し示した方を見、それからまた弘志に向き直つて、言った。

「誰もいないぞ」

武の回想

弘志の家にあがつた武は、しんと静まり返ったりビングを見回し

てした。

ずいぶん寂しいな、と感じた。窓の外に目をやる。雨が降っている。そのせいかもしれない。

連日、しとしと、と雨が降り続いていた。

視線を弘志に移す。

弘志は、虚空を見据えながら、微笑みを浮かべていた。

そして、紹介するよ、と言って、

「妻の紀子と、これが宏子だ」

左手のほうを指し示した。

武は、弘志の正面に向かい合って座っていた。

弘志の左手が指し示したほう、武から見ると向かって右側、そこには、誰もいなかった。

武は、かろうじて、笑顔を作った。

これはクサイね。

浩介の言葉が、脳裏を過った。

「弘志、今、幸せか？」

「当然だろ、幸せだ」

「そうか」

それ以上は何も言えなかった。

弘志の、この状態が、良いのか悪いのか、判断しかねた。

本人はこれで幸せなのだ。

真実を知ることが、真相を暴くことが、果たして、本当に、弘志のためなのか……。

とにかく、ほっつてはおけない。

弘志と別れてから、浩介に会い、同窓会をやるう、と持ちかけた。

最終的に

しばらく、誰も、何も言葉を発しなかった。

浩介が一枚の紙を出した。『宝の地図』だ。

「この地図さあ」浩介は地図の一点を指差して、言った。「印がついてる所に、埋めたんだろ」

宝の地図なんだから宝を埋めた場所に印をつけたに決まっている、当たり前じゃないか、と武は思った。

地図から顔を上げ、弘志を見ると、微笑を浮かべていた顔が徐々に強張ってきていた。

悲哀に満ちた表情に変わり、苦悶を浮かべた顔になっていった。そして、うう、と唸った。

頭を抱えて、うずくまるような格好をした弘志を見て、武は同情した。

浩介は冷淡な表情のまま、

「行くぞ」

と突き放すように言った。

そこは、弘志の家から近い、雑木林だった。

「掘り起こすぞ」

浩介は誰にともなく言つて、印の場所の土を、掘り返し始めた。武も手伝った。

弘志は茫然自失になっているようで、突っ立っていた。立っているのがやっとなのだらう、そう武は思った。

そして。

浩介が言った。

「確かにお前にとっては、宝だらうよ」

浩介は、目の前で、直立不動になって地面に視線を落としている弘志に向かって言ったのだが、弘志は微動だにしなかった。

弘志の妻と子、上尾真二の三人、いや、三体の屍が、そこには埋まっていたのだった。

浩介はそれから、訥々と語られる弘志の話を聞いていたようだが、武の耳には入ってこなかった。

生まれて初めて死体を見た。

衝撃が大きかった。

吐き気が込み上げてきた。

少し離れた場所で、木に手をついて、嘔吐した。

その後

武は浩介の事務所へ来ていた。

「あれから、しばらく経ったけど」

と武。

「どれから？」

「まさか忘れたわけじゃないよね」

事件から数ヶ月経った今でも、武は目蓋の裏に焼き付いた残像に悩まされていた。

「君はよく平気だったね。あの時も」

浩介は神経が太いか無神経かのどちらかだろう、と武は思った。

「平気なものか。腹が立ってしかたなかったね」

「腹を立てたのか」

「人を殺して、さらにそれを俺らに見つけてもらおうとしたんだぞ。」

狂ってる」

武は、弘志は確かに狂ってる、と思ったが、しかしやはり同情的になっただけだ。

「本当にこれでよかったのかな」

奥さんと子どもが生きている、と錯覚していれば、弘志は幸せだったんじゃないか。

「地図を送ってきたんだろ。あれは、かなり屈折したやり方とはいえ、罪の告白だったんじゃないか」

狂気の沙汰としか思えない行動だ、と考えていた武は、あの地図のことなど、記憶の片隅に追いやっていた。

「罪の意識に耐えかねたのか……」

「というより……、錯乱状態だったんじゃないか、と俺は思うけど。まあ、今となっては知る由もないけどな」

「自分の妻と子を自分自身で殺めてしまったから、か」

「それ以前から、様子がおかしかった」

「リストラされて」

「うむ」

「妻と、敵視してた同級生と一緒に歩いているところを見かけて」

「ふん」

「誤解と嫉妬心と、ねじれた愛憎で」

「可愛さ余ってなんとやら、だな」

「でも、解らないな」

「俺だって解らないさ」

「そもそも紀子と上尾真二は何で一緒にいたんだ」

「あの時、言ってたじゃないか」

あの時、というのは、武が吐いて吐瀉物に土を被せていた時だったから、武は聞いていなかったわけだが、そんな様子を見てなかった浩介は、呆れたように言った。

武にしてみれば、あれで平然としていられる浩介に対して呆れたところであった。

「三人を殺した後に気づいたことだが」浩介は何かを取り出した。「弘志への、父の日のプレゼントを選んでたんだ」

そのプレゼントも、そして、殺害してしまったという記憶さえも、一緒に埋めてしまったのだ。

そう言っつて、事務所の机の上に、紙を広げた。

地図だった。

弘志が描いた地図とは違う地図だ。印がつけてある所は、上尾真二が埋められていた場所だった。

「紀子は気付いていたのか」

夫、弘志が、上尾真二を殺したことを。武が呟いた。

浩介が言った。

「罪の告発、警告、そう弘志には思えた。だがこれは……」

「できれば自首してほしいかったのかな、紀子は」
武は、ますます、やりきれない気分になった。

「今となつては、もう」

知る由もない。死人に口無しだからな。浩介の言葉が虚しく響いた。

弘志もまた、帰らぬ人となっていた。

浩介が自首を促して、警察へは通報しなかった。

だが、あの日のうちに彼は、自宅で首を吊ったのだった。

その事実を最近になって知り、武は浩介のもとを訪れたのだった。

やるせない。

そんな武の気持ちを察してか、浩介は言った。

「呑みに行くか」

エピソード

「ねえ、パパ」

弘志は、宏子に服の裾を引っ張られた。

「うん？」

「ママにプレゼントしようよ」

宏子はひそひそ声でしゃべった。

「プレゼント？」

「ははのひ」

「母の日」

弘志はおうむ返しに言った。

ああ、宏子も、そんなことを言うようになったか、と弘志は嬉しくなった。

「ひろこね、絵をかいたの」

言いながら、弘志にその絵を見せた。

紀子を描いたものだった。

弘志は微笑んだ。

「じゃあこれを、母の日に、ママに渡すんだね？」

「ううん」

にいつと宏子は笑った。

紙を差し出した。

それを見て、弘志は、

「宝の地図？」

と訊いた。

「これをうめて、たからさがしするんだよ」

弘志は、我が子の成長を喜ぶとともに、母の日にプレゼントを探させられる紀子の姿を想像して、苦笑した。

でも、それも、親子の良い思い出になるか。

「それは、いいね。すごいぞ、宏子」

宏子の頭を撫でて、髪の毛をくしゃくしゃにした。

唐突に、雨の音が聞こえた。

現実に引き戻された。

彼方へ葬られていた記憶を、思い出していたのだ。

梅雨の時季特有の、じめじめした空気が室内に漂っていた。

だが、弘志は、霧が晴れたような、清々しい気分だった。

天井からぶら下がっている、縄の輪を見つめた。

弘志は、幸福な気持ちで、最期を迎えた。

(了)

(後書き)

あくまでフィクションです。

作品として見ていただければ幸いです。

決して自殺を推奨するわけではありません。

言うまでもなく、筆者はいかなる理由があろうとも、殺人や自殺や、あらゆる差別には反対です。

ミステリなので、読者をどう欺くかに重点を置きました。

登場人物の発言や物語は、私個人の自己主張は、全くないわけでもありませんが、基本的には人物像の設定で必要だったということですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1420i/>

宝の在り処

2010年10月11日16時28分発行